

◇「デクノボー」の生き方を—経済学者 中山智香子さん(48)

「賃金が上がるといっても、正社員だけですよね」。2日、東京都調布市の西部公民館で開かれた成人学級で、息子が派遣社員として働いているという中年女性が声を上げた。「年金の支給開始が延び、そこまで働くのはきつい」。別の女性は将来の不安を訴えた。

約20人が参加したこの日のテーマは「**経済ジェノサイド**」。ジェノサイドとは戦争などによる大量虐殺を意味する。成人学級には似つかわしくない表題だが、講師の中山智香子さんは世界の潮流となっている新自由主義経済への怒りを、この言葉に込めた。

「安倍晋三首相誕生」への期待から昨年11月以降、平均株価は急ピッチで上昇を続け、リーマン・ショック(2008年9月)前の水準を突き抜けた。お金を市場にばらまく大胆な金融緩和や公共事業中心の財政出動などを柱とするアベノミクスに金融市場は熱狂する。そこに潜むものは—。

中山さんは言う。「**市場の規制をなくし、お金だけが大事というのが新自由主義。強きを助け弱きをくじく、言ってみれば経済を大義名分に大量虐殺をしているようなものです。アベノミクスはそれと同じです**」

非正規社員の低賃金を犠牲に正社員の賃金を上げ、「さっさと死ぬるようにしてもらおう」(麻生太郎財務相の終末期医療に関する発言)社会を目指し高齢者に希望を与えない日本に絶望を抱き始めた人は少なくない。東日本大震災を経験しながら、アベノミクスという衣をまとい震災前と同じお金主義の道へまた戻ろうというのか。



ベルリンを東西に隔てていた壁が崩れたのが1989年。2年後、ソ連が崩壊し冷戦は終わった。世界の市場が一つになったことで多くの人は明るい日々の到来を予感した。だが、その深層で新自由主義は勢いを増していく。「アメリカは経済支援を権力や政治の道具として使い、多くの国を味方へと矯正していきました。その後押しをしたのが新自由主義の考え方です。90年代以降はグローバル化と経済の金融化の流れの中で、その暴力性がより強まりました」。**01年9月の米同時多発テロは、アメリカが覇権を維持するため他国に自分たちのやり方を押しつけ、貧困を生んだ一つの結末だった**とみる。「そこで私たちは成長至上主義の危うさに気づくべきでした。しかしそうはならず、アメリカはすぐさまアフガニスタンやイラクに軍隊を送り込んで報復した。新自由主義はますます凶暴化してお金の暴走を招き、リーマン・ショックを引き起こしてしまったのです」

誘い文句は、大企業や富裕層を支援すれば経済が活性化し、金持ちがもうかれば低所得層にもお金が流れていくという「トリクルダウン(流れ落ちる、の意)」の考え。その実現のためには規制のない自由な市場が必要だとし、国と個人を巻き込んでいった。「誘っておきながら厳しい競争をさせ、相手を蹴落としていく。頑張らなかつたからという理由をつけて。あるとされた金持ちからのおこぼれはありません。一部の国や個人が独り占め。それは日本も同じだった」

貧困から抜け出すために働け、市場で買われるように自分の価値を高めると、新自由主義は人々を容赦なく追い立てた。

「その本質は人間の使い捨てです」

中山さんは震災後、組織化される前から脱原発デモに参加している。「大規模かつ中央集権的にエネルギーをつくることで雇用を生み、立地住民の不安には補助金をあてがい安全神話で言いくるめる。さらに研究上の便宜などを与えた技術者の権威をもって素人が議論できないようにしてきたのが原発でした。アメリカが覇権維持のためにしたことと同じで、新自由主義の正体そのものです。3・11はそんな私たちにダメ出ししたのです」

2年がたち、震災の記憶が薄れていくことを嘆く。「3・11を経て経済のありようが問われているにもかかわらず、アベノミクスはお金をばらまいている。お金がいつまた暴走を始めるか、誰にもわからないのに。しかも原子力に頼ろうとしている」。言葉に憤りがこもっていく。

聞きながら、一つのエピソードを思い出した。昨年12月、イギリスのエリザベス女王がイングランド銀行を訪れた際、銀行幹部が4年前の質問に答えようと、女王に話しかけた。リーマン・ショック直後の08年11月、ロンドン大学を訪れた女王の「なぜ誰も、(金融危機を) 予想できなかったのでしょうか」との問いかけに、当時は誰も答えられなかった。それに答えるため、銀行幹部は金融が複雑になったことを説明すると、女王は「人々が少しだらしなくなってきたのでしょうか」と切り返した。懲りない人間の安易さを突いたのだ。この国もまた。



震災前の道に戻らないためにどうしたらいいのだろうか。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」にヒントがあると中山さんは言う。「皆にデクノボーと呼ばれ、ほめられもせず苦にもされず。人と自分を比べようとしない。前に進むばかりがいいのではない。何かおかしい、変だなと思ったら立ち止まる。つじつまや帳尻を合わせるのがうまい器用者ではなく、不器用な生き方です」

ある授業で「ニートは不服従」という学生の指摘にはっとさせられたという。教育を受けず、働きもしないニートを「役立たず」「甘えている」と切り捨てるのは簡単だ。だが「それは突き詰めれば、その人を殺すことにつながります」。がつつ働くことへのノーの意思表示と捉えれば、社会に適応できないだけと理解できる。「ほめられ」はしないが、ならば彼らを「苦」と決めつける私たちはどういう存在なのか。

長引くデフレから、若者たちは「少し」で生きていけることを学んだ。稼いで自動車や家電を買い、いつかは家を建てる。団塊の世代からしばらく後の人々までが普通に持っていた「たくさん」を得るために働くという価値観は、ほこりをかぶり始めているのかもしれない。

ビクトリア朝時代のイギリスの思想家、ジョン・ラスキン(1819～1900年)は著書「この最後の者にも」で「**穏やかな経済**」の大切さを説いている。「**最後の者にも分け前がいくように、一人一人が自らの分け前を必要以上に求めない経済**」という意味。私の好きな言葉です。でも現実には、私たちはいつの間にか、最後の者に分け前が届かない社会をつくってしまった」と中山さん。それは「ジェノサイド」への加担ではないのか。

ラスキンは「生よりほかに富はなし」とも言っている。「宮沢賢治がああ詩で示した生き方は、それを地でいくものでした」。ここに豊かさの意味がある気がする。【内野雅一】

■人物略歴

◇なかやま・ちかこ

1964年、横浜市生まれ。早稲田大学大学院経済学研究科博士後期課程を単位取得退学、ウィーン大学大学院博士課程

修了。熊本大学を経て2000年から東京外国語大学。現在、同大学院教授。専門は経済思想。著書に「経済戦争の理論」
「経済ジェノサイド」など。